

絞
め
斬
り
日

梗概

小説家志望の白石（33）は文学賞のコンクールへ挑戦する日々を送るも、小説を完成させられぬまま毎回のようには締め切り日を逃していた。

切羽詰まった白石は最終手段として「絞め斬り屋」の安藤（26）のもとを訪れる。

ここでは締め切り日を守れない人間の悩みを解決するために「絞め斬り日」なるサービスが提供されており、締め切りを破った顧客に対して恐ろしい暴力（絞め斬り）が行使されるのだった。

白石はサービスを利用して文学賞の締め切り日を絞め斬り日と定め、不退転の覚悟で数々の賞に挑み始める。

しかし生来の怠け癖がたたって一向に小説は完成せず、絞め斬り日が訪れる度に白石は白紙の原稿を応募してやり過ごしていた。

そして迎えた年末。最後の絞め斬り日に臨む白石だったが、トラブルに見舞われたことで賞へ応募できずに絞め斬り日が過ぎてしまう。

安藤の足音が白石の自宅に迫る中、機転を利かせた白石は絞め斬り撃退屋の佐藤（29）に安藤の撃退を依頼。安藤と佐藤の壮絶な戦いの結果、佐藤が勝ったことで白石は難を逃れる。

戦場と化した自室に散らばった白紙の原稿を呆然と見つめる白石。真冬の静寂が包み込む中、白石の文学賞への挑戦が今年も幕を下ろすのだった。

《登場人物》

白石 (28) (33) 小説家志望の男

安藤 (26) 絞め斬り屋

佐藤 (29) 絞め斬り撃退屋

西岡 (28) (33) 白石の友人

女子中学生 1、2

○神社の境内（元旦）

初詣の参拝客らで賑わっている。

○白石の部屋

IRの小汚い室内。

白石（33）、机にかじりついてパソコンのキーボードを叩いている。

壁に貼られた以下の書き初め。

「今年で決める」。

○パソコン画面

原稿用紙が表示されている。

以下の文章が入力されてゆく。

「隣で眠る君の青白い額には無数の汗の粒が浮かんでいた。何か恐ろしい悪夢に――業火の炎に灼かれるが如く君はうなされ、真紅の唇からは呻き声が漏れた。しかし私は君の体を揺さぶるのを躊躇った。目を覚ませば悪夢よりおぞましい地獄が待ち構えているのだ。ああ。忌まわしき人生よ。神はなぜ私た

ちを病葉の季節に生まれ落としたのだ」

○（戻って）白石の部屋

白石、夢中でキーボードを叩いている。

×

×

×

床にチューハイの空き缶。

白石、酔いつぶれて寝ている。

パソコン画面に書きかけの小説。

原稿用紙のページ数は∞。

○回転寿司屋・店内（数日後）

テーブル席に白石と西岡（33）。

白石、向かいのテーブル席にいる女子高

生たちの姿を見ている。

西岡（33）、寿司をつまみながら、

西岡「（白石へ）何見てんだよ？」

白石「…いや、創作の参考として」
「Xが頼む寿

司ネタを観察してる」

女子高生の一人、コハダをつまむ。

白石「…コハダか。渋いな」

西岡、おしぼりで口をふき、

西岡「(疑う)お前さ、ほんとに書いてんの？」

白石「え」

西岡「いや、小説」

白石「いや、書いてるけど。何で？」

西岡「だって俺が読んでやるっていつてるの
に見せてきた試しがないじゃん」

白石「…普段小説読まない奴の感想なんか聞
いてもしょうがないし」

西岡「お前、俺に小説家になるっていつて何
年経つよ？」

白石「…」

西岡「友人としていうけどもさ、いい加減現
実を見ろよ」

○白石のアパート

古びた建物。

○アパートの外廊下

白石、郵便受けを開ける。

大量のチラシが入っている。

白石、チラシを見ていく。

あるチラシを見て白石の手がとまる。

チラシに以下の文字。

「締め切りや納期が守れずにお困りの方、
当社にお任せください。」

絞め斬り屋 0120-999-999」

白石「…？」

○絞め斬り屋・オフィス（翌日）

白石、カウンター席に座って用紙にペンを走らせている。

正面でスーツ姿の安藤（26）が、にこやかな顔で白石の様子を眺めている。

用紙に以下の文字。

「希望絞め斬り日 3月31日」

「理由 応募したい文学賞の締め切りがあるため」

白石、書き終え、ペンをおく。

白石、安藤へ用紙を渡す。

安藤、用紙を眺める。

安藤「（笑顔で）ありがとうございます。では
ご手続きのほうを進めて参りたいと思います」

○白石の部屋（回想）

白石、チラシを片手にスマホで電話して
いる。

安藤の声「お電話ありがとうございます。絞
め斬り屋の安藤です」

白石「あ、チラシ見て電話したんですけど…」

安藤の声「ありがとうございます。何かお困
りごとでしょうか」

白石「あ、いや、どんなサービスなのかと思
って…」

安藤の声「はい。私ども絞め斬り屋のサービ
ス内容を簡単に申しますと、締め切りを守る
ことができずにお困りのお客様へ向けて、き
ちんと締め切りを守って頂けるようにするた

めのサービスをご提供させて頂いて頂いております」

白石「：締め切りを守らせる？ そんなこと
できるんですか？」

安藤の声「例えば一般社会ですと締め切りを
破っても命に関わることはありません。まし
てや個人で掲げた目標などは期間内に達成で
きずともお咎めはありません。しかし、もし
締め切りを破ると命に関わるとしたらどうで
しょう？」

白石「はあ」

安藤の声「ずばり私どもがご提供させて頂く
サービスは暴力によるお咎めとなります」

白石「：暴力？」

安藤の声「絞めたり、斬ったり、暴力の恐怖
をもってお客様のお悩みを解決する。それが
絞め斬り屋でございます」

白石「：（あ然）」

安藤の声「もしよろしければぜひ一度当社に
いらしてみてはいかかでしょうか。お客様の
お力になれることをお約束します」

○（戻って）絞め斬り屋・オフィス

安藤、上着のポケットから名刺を出す。

安藤「申し遅れました。安藤と申します（と名刺を差し出す）」

白石、名刺を受け取る。

安藤、用紙を眺め、

安藤「この度は文学賞へのご応募のためということですが、他に賞へのご応募の予定などはございますでしょうか」

白石「え」

安藤「もしありましたら、今ならまとめてご契約して頂くとまとめ割りで料金がお安くなります」

×

×

×

用紙の「希望絞め斬り日」の欄に以下の日付がずらりと並んでいる。

「3月31日」「5月31日」「7月7日」「8

月 1 日」「8 月 31 日」「10 月 1 日」「10 月 20 日」「12 月 20 日」。

安藤「絞め斬り日のご契約本数は計 8 つでよろしいでしょうか」

白石「：はい」

安藤「絞め斬り日の時間帯を細かく指定することも可能となっております」

白石「じゃあ、近所の郵便局が閉まる時間に合わせて 5 時で」

安藤「8 つすべて 17 時絞めで？」

白石「はい」

安藤「かしこまりました」

安藤、用紙の補足欄に「17 時絞め」と追記。

安藤、契約書を取り出す。

安藤「では最後にご契約内容と注意事項のご説明をさせて頂きます」

安藤、契約書に書かれた文言をペンで示しながら、

安藤「お客様にはご契約された絞め斬り日ま

でにお客様自身が抱える締め切り、つまり、賞の締め切りを守って頂きます」

白石、じつと聞いている。

安藤「締め切りをお守りになりましたら、その証拠となるものを私どもへご提出して頂きます。お客様の場合ですと、応募原稿を送った際の書留を撮影した画像等を私のもとへ送信して頂くことで締め切りを守られたことの証明となります」

安藤「絞め斬り日までに締め切りを守ったことの確認が取れなかった場合、絞め斬りの実行、つまり、生命に支障をきたさない程度の暴力をお客様へ行使させて頂きます」

安藤「ご契約はいかなる理由があっても途中で解約することはできません。絞め斬り日を過ぎてしまいますと絞め斬りが実行されます」
安藤「絞め斬りによって傷害や器物破損などの被害を受けた場合、警察への通報など法的な手段を取られてしまいますと違約金をお支払いして頂くことになるのでお気をつけくだ

さい」

安藤、白石にペンを差し出す。

安藤「同意されましたらサインを」

白石、躊躇いつつペンを取る。

白石、決意を固めて契約書に自分の名前を書き込む。

○道（夕）

白石、歩いている。

白石のスマホが鳴る。

白石「（出て）もしもし」

西岡の声「今トリキで飲んでる。お前もこいよ」

白石「そんな暇ないって」

西岡の声「まだ正月休みだろ？」

白石「いや、小説をさ」

西岡の声「え？」

白石「俺、命懸けで書くことにしたから」

○公園（3月31日）

花見をする人々で賑わっている。

○白石の部屋

ラジカセからロックなBGMが流れている。

テロップ「3月31日。若富士文学賞締め切り日」

床にチューハイの空き缶。

白石、パソコンの前で酔いつぶれている。パソコンの画面には書きかけの小説。

原稿用紙のページ数は4。

白石、目を覚ます。

白石、はっとして時計を見る。

壁時計の針が15時を指している。

白石、急いでパソコンの前に座る。

が、白石、何も書けない。

白石「（呻く）あああああああ」

白石、スマホを手にする。

以下のキーワードを検索する。

「絞め斬り日 守らない どうなる」

スマホ画面に（演出で）モザイク処理された画像がずらり。

白石、思わず立ち上がる。

白石、台所で吐く。

×

×

×

壁時計の針が10時を指している。

白石、パソコンの前に座っている。

白石、原稿用紙の真ん中に「空白の世界」

と入力する。

×

×

×

白石、プリンターで印刷している。

プリンターから「空白の世界」と書かれた表紙が印刷されて出てくる。

白石、机の上に置かれたコピー用紙を分量でひとつまみする。

白石、手にしたコピー用紙に表紙を添え、

クリップで綴じる。

白石、それを茶封筒にぶち込む。

× × ×

宛名と宛先が書かれた茶封筒。

白石、切手を貼り付ける。

○道（夕）

白石、茶封筒を抱えて小走りしている。

○郵便局・中

白石、郵便局員に茶封筒を渡す。

白石「（郵便局員へ）書留で」

○白石の部屋

壁時計の針は17時を迎えようとしている。
る。

白石、書留の控えをスマホで撮っている。

白石、撮影した画像をメールに添付する。

宛先は「安藤さん」。

白石、メールを送信する。

と、すぐにスマホが鳴る。

着信は「安藤さん」。

白石、おそるおそる出る。

安藤の声「安藤です」

白石「…はい」

安藤の声「証拠の画像のほう、ご確認致しました。この度はご応募おめでとうございます」

白石、ほっとする。

○本屋・店内（翌日）

白石、小説を立ち読みしている。

女子中学生「、女子中学生」、やってくる。
る。

女子中学生「、一冊の新作小説を手に取り
る。

女子中学生「（嬉しい）これだ」

女子中学生「あー。ウチも読みたいから買
おうかな」

女子中学生「読んだら貸してあげるよ」

女子中学生「いいの？」

女子中学生「うん」

女子中学生「ならさ、半分ずつ出し合って

買お」

女子中学生「(頷く)」

女子中学生「いこ」

女子中学生「、去っていく。

白石「(二人を見て)…」

○居酒屋・店内(回想)

白石(28)、西岡(28)、飲んでいる。

西岡「(焼き鳥を頬張りながら)お前、本気で
いってんの？」

白石「…」

西岡「いや、別に何目指そうとお前の勝手だ
けどさ。小説家だって？」

西岡、ビールをあおる。

白石「…俺、昔からずっと小説書いてみたい
と思ってたんだよ。なんかさ、自分の書いた

小説で大勢の人を楽しませたいっていうか」
西岡「いやあ。そんな甘いもんじゃないと思
うぞ？」

白石「わかってる。けどやってみなきゃわか
んないだろ（とビールを飲む）」

西岡「まあ、そうだけだよ」

白石「そうだ。書いたらお前に読ませてやる
よ」

○（戻って）白石の部屋（夜）

白石、壁に貼られた「今年で決める」の
書き初めを見上げている。

白石、力強く頷く。

白石、パソコンの前に座る。

白石、ラジカセのスイッチを入れる。

ロックなBGMが流れ出す。

以下、カットバック

○白石の部屋（5月31日）

テロップ「5月31日 朝陽文学賞締め切り日」

白石、パソコンの前に座っている。

白石、キーボードで「空白の世界」と入力する。

○パソコン画面

ダイアログに以下の文言。

「下記ファイルをアップロードしますか？」。

表示されているファイル名は「空白の世界」。「sxop」。

「はい」がクリックされ、以下のメッセージが出る。

「朝陽文学賞への応募が完了しました」

○白石の部屋

白石、応募完了画面をスマホで撮影する。

○白石の部屋（7月7日）

テロップ「〃月〃日 南の文学賞締め切り日」

白石、プリンターで印刷している。

プリンターから「空白の世界」と書かれた表紙が出てくる。

○郵便局・外

白石、茶封筒を手に郵便局内に入っている。

○白石の部屋（8月1日）

テロップ「8月1日 NEMS文学賞締め切り日」

白石、机の引き出しを開ける。

「空白の世界」の原稿がストックされている。

白石、原稿を一つ取る。

○街角（8月31日）

白いTシャツを着た男、立っている。

白の男「(カメラへ) 空白の世界」

○一軒家の門の前(10月1日)

父、母、息子、娘、立っている。

一同「(カメラへ) 空白の世界」

○野原(10月20日)

アジア系、ヨーロッパ系、アフリカ系、
と様々な人種の人間が並んでいる。

一同「(カメラへ) 空白の世界」

カットバック、おわり

○パチンコ屋・店内(12月20日)

白石、パチンコをしている。

テロップ「12月20日 葛屋文学賞締め切り

日」

○白石のアパート・外廊下

白石、景品のクジラッキーのぬいぐるみ

を抱えてやってくる。

白石、郵便受けを開ける。

中に一枚のチラシ。

白石、チラシを手にする。

チラシには以下の文字。

「絞め斬り日を守れずにお困りの方、当社にお任せください

絞め斬り撃退屋 0120-999-0011」。

白石「…」

○白石の部屋（夕）

白石、机の引き出しを開ける。

「空白の世界」の原稿のストックがない。

白石「…切らしたか」

○ホームセンター・店内

客で混雑している。

白石、コピー用紙を持ってレジの列に並んでいる。

白石、スマホを見る。

時刻は16時02分。

レジで客が店員にクレームをつけている。

白石、イライラする。

○道

白石、コピー用紙を持って走っている。

○白石の部屋

壁時計の針が16時半を回っている。

白石、プリンターで「空白の世界」と書かれた表紙を印刷する。

白石、コピー用紙をひとつまみし、表紙を添えてクリップで綴じる。

○郵便局・中

白石、郵便局員に茶封筒を差し出す。

○白石の部屋

壁時計は16時50分を指している。

白石、コップの水を一口飲む。

白石「何とか間に合いそうだな：（とコップを机に置く）」

白石、ポケットから書留の控えを取り出す。

と腕がコップに当たり、コップの水をこぼしてしまう。

机に置かれていたスマホが水に濡れる。

白石、急いでスマホを手にとる。

白石、ティッシュでスマホを拭く。

白石、スマホを操作するが、電源が消え
たまま反応がない。

白石「：ウソだろ？」

×

×

×

壁時計が16時57分を指している。

白石、必死にスマホにドライヤーを当てている。

白石、スマホを操作する。

白石「つけ！」

スマホ、起動する。

白石、ほっとする。

白石「急げ急げ」

白石、スマホをカメラモードにする。

白石、スマホのレンズを書留の控えに向ける。

カメラ画面が真っ白にぼやけている。

白石「…？」

白石、レンズを見る。

スマホのレンズの内側に無数の水滴がついている。

白石「…」

白石、スマホで電話をかける。

安藤の声「お電話ありがとうございます。絞め斬り屋の安藤です」

白石「（早口で）5時にそちらの絞め斬り日があるんですが、トラブルでカメラが壊れて証明のための画像が送れない」

安藤の声「絞め斬り日には締め切りを守った

ことの証明が必要になります」

白石「だから画像が送れないんだッ。締め切りには間に合っている」

安藤の声「いかなる理由があっても締め切り日までに証拠のご確認が取れない場合、締め切りが実行されます」

× × ×

壁時計が「」時∞分を指している。

白石、大きなバッグに服や本など詰めている。
いる。

とインターホンが鳴る。

白石、動きが止まる。

安藤の声「ごめんください。絞め斬り屋の安藤です」

白石「：」

再びインターホンが鳴る。

安藤の声「出ていただけないようなのでこれより強制的に中へ入らせて頂きます。なお、

チェーンがかかっている場合はペンチで破壊
させて頂くのでご了承ください」

ドアの外でカチャカチャと鍵穴をイジる
音が鳴り始める。

白石、パニックになって室内をうろつく。

白石、以下のチラシが目に入る。

「絞め斬り日が守れずにお困りの方、当
社へお任せください」

絞め斬り撃退屋 0120-999-0011

白石、スマホで電話をかける。

声「お電話ありがとうございます。絞め斬り
撃…」

白石「(早口で) 絞め斬り屋に襲われてる」

声「ご住所を伺ってもよろしいでしょうか」

白石「調布市〇丁目13番地…早くきてほし
い」

声「調布市ですと今近くに一人おりますので、
〇分程で到着できると思います。よろしい
でしょうか」

白石「いいから早くきてくれ」

声「緊急のご依頼ですので通常料金よりもお高くなってしまうます。また絞め斬り屋を撃退できなかった場合も料金を頂くことになりますので予め：」

白石「何でもいいから早くきてくれ！」

白石、電話を切る。

×

×

×

白石、必死に玄関のドアを抑えつけている。

ドアが開けられ、安藤が顔を出す。

白石、力を振り絞ってドアを閉めようとする。

白石と安藤、ドアを引き合う。

白石、力尽きて尻餅をつく。

安藤、開いたドアの隙間からペンチを差し込み、チェーンを切る。

白石、部屋の奥へ逃げる。

安藤、入ってくる。

安藤、白石の目の前に立つ。

安藤、懐からナイフを取り出す。

白石「(絶句) …」

安藤、白石へナイフを振り上げる。

白石「！！」

声「ごめんください！」

絞め斬り撃退屋の佐藤(29)が猛然と室内に突入してくる。

佐藤、安藤に襲いかかる。

佐藤、安藤をベッドに投げ飛ばす。

佐藤、ナイフを取り出す。

佐藤と安藤、ベッドの上でナイフで切り

つけ合う。

白石「(呆気に取られる)」

安藤、佐藤を蹴り飛ばす。

佐藤、冷蔵庫の前に吹き飛ばされる。

安藤、すかさず佐藤へナイフを投げる。

佐藤、冷蔵庫の扉を開けてガードする。

佐藤、冷蔵庫の中から生卵を取り出す。

佐藤、生卵を冷蔵庫の上に置かれた電子

レンジに入れてスイッチをONにする。

くるくる回る電子レンジ。

佐藤、安藤へ体当たりする。

安藤、吹き飛ばされ、ラジカセに直撃。

弾みでラジカセからロックなBGMが大音量で流れる。

安藤、BGMに気を取られる。

佐藤「もらった！」

佐藤、安藤へナイフを突き刺す。

佐藤「?!」

が、安藤の姿はなく、ナイフが刺さったのはぬいぐるみのクジラッキー。

佐藤「変わり身の術だと！」

佐藤、辺りを見回す。

背後から安藤がぬっと現れ、佐藤の首に

延長コードを巻き付ける。

佐藤、首を絞められて呻く。

安藤、力一杯絞める。

佐藤、顔を充血させながら電子レンジへ向かう。

佐藤、必死に電子レンジへ手を伸ばす。

佐藤、電子レンジの中の温めた生卵を掴み取る。

佐藤、安藤の顔めがけて生卵を投げる。

卵が爆発し、安藤、喘ぐ。

佐藤、隙をついて延長コードから抜け出し、台所にあるフライパンを手に取る。

佐藤、フライパンで安藤を滅多うちにする。

安藤、血まみれになる。

安藤、転げるように玄関の外へ逃げ出す。

佐藤、安藤を見送る。

佐藤、ラジカセのBGMを消す。

室内が静寂に包まれる。

佐藤「(白石へ) 料金は10万円になります。

お支払いはどうなさいますか？」

白石「：カードで」

と玄関から消火器をもった安藤が現れる。

白石、震えながら指さす。

佐藤、安藤に気づく。

佐藤、安藤の髪の毛を引っ掴んで玄関の外へ出ていく。

外廊下で激しい物音。

佐藤、戻ってくる。

佐藤、白石へクレジットカード端末機を差し出し、

佐藤「ここにカードを差し込んでください」

○外（夜）

雪が降っている。

○白石の部屋

白石、物が散らばった室内に佇んでいる。

壁に貼られた「今年で決める」の張り紙がひらりと床に落ちる。

白石、窓の外を見る。

白石、降り注ぐ雪を見つめ、

白石「…来年こそ決めてやる」

（おわり）